

フットパスと身近な土木遺産に 関する一考察

寺村 淳¹・島谷 幸宏²

¹ 正会員 九州大学大学院学術研究員 工学研究院 (〒819-0395 福岡県福岡市西区元岡 744)

E-mail: j.teramura@civil.kyushu-u.ac.jp

² フェロー会員 九州大学大学院教授 工学研究院 (〒819-0395 福岡県福岡市西区元岡 744)

E-mail: shimatani@civil.kyushu-u.ac.jp

近年、土木遺産が地域資源として認識され、世界遺産や観光スポットとして地域づくりの中で活用されるケースが増えている。一方で、インフラとして整備された土木構造物は通常普遍的であり、地域の中に当たり前に埋没している身近な土木遺産はこれらの様に地域資源として認識されていないことも多い。

この様な背景から、全国で取り組まれているフットパスの視点で身近な土木遺産について検証した。この結果、フットパスのコースづくりの過程で身近な土木遺産は発見される傾向にあり、特に九州のコースでは身近な土木遺産が地域資源として評価されていることが明らかになった。

キーワード:土木遺産, フットパス, 地域資源, まち歩き, シビックプライド

1. はじめに

近年、近代化遺産群の世界遺産への登録等、土木遺産が地域資源として注目されている。一方で、土木遺産は地域のインフラであり、古い歴史があっても現役であるものも多い。この様な土木遺産は災害で被災した際など、機能やコスト優先で修復され、その意匠、本来性を完全に無視し、遺産としての価値を喪失することが多々ある。この背景には、土木遺産が、当時当然の様にインフラとして築造されたため、または古すぎて、設計図、築造年などの根拠が不明瞭なため文化財指定できない問題や、普遍的構造物であり、唯一性や希少性など薄く、遺産としての価値が見いだされない等の問題がある。

しかしながら、普遍的な用水であっても、数百年その地域を潤してきたものは多々あり、400年現役の石橋、集落を繋ぐ里道など、地域固有の風景を下支えしているのはありふれた土木遺産である。

希少性、唯一性のある土木遺産も非常に重要であるが、地域にありふれた、地域社会の礎となっている名もなき身近な土木遺産も重要であると考える。

この様な背景から、地域社会の背景として埋没しがちな身近な土木遺産の発見、活用について、歩く地域づくりとして注目されている“フットパス”の視点を通してその可能性を考察する。

2. フットパスとは

フットパスとは、“ありのままの風景を歩く小径”として、近年、日本全国の地域づくりで注目され導入されている「歩く地域づくり」である。

元々は、イギリスのレクリエーション権や土地所有者による土地の囲い込みに対する「利用権」の獲得の流れによって発生したアクティビティで、イギリスでは、旅やレジャーの一つとして普遍化されている¹⁾。

近年では、footpathの言葉自体も世界中で普遍的に使われるようになりつつあり、歩道や歩くための道の意味合いで一般的に使われている。

イギリスでは、フットパスを楽しむ「ramblers」という全国的な組織があり、フットパスユーザーを受け入れるためのWaW (Walkers are welcome town) という仕組みも広がりを見せている²⁾³⁾。

日本では、1990年代から、町田、北海道、甲府、長井などで同時多発的に始まり、これに後発的に九州での取り組みが2010年から始まったことで、地域づくりツールとして注目が集まり、全国で取り組まれるようになった。各地にそれぞれの特色があり、町田では東京郊外の少なくなった里山の環境を保全する一環として始まり、北海道では雄大な自然景観を楽しむツールとなっている。山梨では、トンネルを活用したワインセラーや勝沼堰堤がコ

ースに含まれている⁴⁾。

九州では、熊本県上益城郡美里町で初めて取り組まれた。この発端が、地域資源を活用した体験プログラムを展開する自然学校と、緑川流域の石橋ガイドがフットパスの仕組みを知り、美里町の地域資源の活用に適していると判断したことにある。

美里町で始まった九州のフットパスの取組みは、他の地域と比較して、中山間地での地域づくりのノウハウを綿密に組み込んだ、地域づくりツールとして独自性と優位性を持って、急速に広がりを見せている。

(1) フットパスづくりのプロセス

フットパスのコースづくりに共通することとして、徹底的に地域を歩くプロセスがある。特に、町田や美里のフットパスではこのプロセスを重視し、町田では関係者と共に歩くことによって参画者を増やす。美里では、関係者と歩くことに加え、コース上の住民に道を聞く、話を聞く等のプロセスで出会った地域住民を参画者化し、地域の道をコースとしてよいかの合意形成も行う⁵⁾。

コースづくりの過程では、季節によって、進行方向によって、天候によって風景の見え方が異なるためコースづくりを繰り返し時間をかけることを良しとしている。

また、フットパスのコースづくりでは、観光スポットめぐりの点と点を繋ぐコースではなく、歩くことが魅力的な線としての魅力を持ったコースを重視する。歩くことが移動ではなく楽しみであるという「rambling」を重視しているためである。

何度も地域を歩くことによって目立たない地域資源の発掘にもつながり、小さな発見はフットパスコースの大きな魅力の一つとなる。

地域資源の大きな要素に人材があり、どのような地域にも主体的に動くプレーヤーとピンポイントで支援するサポーターを見出すことが可能である。特に婦人会等は日常的な集会の延長として、「縁側カフェ」などのおもてなしができ、コースづくりの重要な素材の一つである。

地域資源、人材を発見しつくすまで地域を歩き、理解した結果としてコースが出来上がる。

また、コースづくりにあたって、ありのままの風景を歩くため、コースづくりのために地域を主導的に改変しないことも重視している。新しい道を整備しない。本来道は地域の管理で成立しているため、フットパスコースであってもフットパス運営者が管理することはない。地域の風景を維持するのは地域である。ただし、フットパスコースとして適切に取り組みが展開された場合、地域の管理の質は地域主体で向上し、道、水路、石垣、里山などが美しい状態を保つ結果となる⁶⁾。

これらのフットパスコースづくりのプロセスはFNQ(フ

ットパスネットワーク九州)の実施する、フットパス大学の講座で伝えられることのごく一部である。

(2) フットパスの得手不得手

フットパスは「誰でもできる地域づくり」のツールであり、幅広い範囲で有効な手段の一つであるが、コンセプトから得手不得手のあるツールでもある。

フットパス自体が、本来ありのままの風景を歩くことが目的である。これは一般的な地域づくりの中でも、地域を知る、地域資源を発掘する段階として必ず通るプロセスでもある。地元学の集落点検とフットパスコースづくりは類似している。

そのため、フットパスコースづくりは地域資源の発見、地域人材との接触、地域の状態の理解などに長けている。

また、美里フットパスでは、元来の目的を交流人口の増加においていて、地域と外部との接触、交流を重視している。つまり、経済的利益より、交流などによって得られる社会的な利益を重視している。

加え、低コスト、特別な技術がいらないなどのハードルの低さも取り組みやすさとして挙げられる。

一方で、フットパスコース自体は基本的にオープンコースで、コースを知る一般人が自由に歩くことが前提であるため、コースを開いても、フットパス自体で経済的な効果が直接的に発生することはない。コース運営者がウォーキングイベントを開くが、1コース年に数回程度で、直接的な雇用を生む経済性はなく、生業とすることは難しい。地域資源を現金化できるツールではないことは明白である。

しかしながら、地域住民が外部との交流により得られる満足感、来訪者の増加、地域の魅力を内外で認識するなど社会関係資本の視点では大きな効果がある。

3. フットパスマップと土木遺産

これまで、美里町でのフットパスづくりの原点の一つに石橋めぐりがあること、甲府ではトンネル等が活用されていることを述べてきた。フットパスは、特別でなくとも地域の中に根付いた地域資源を発見するためのプロセスがコースづくりに含まれているため、フットパスコースには作成者が発見した地域資源が必ず含まれている。

美里フットパスでは多くのコースに石橋があり、霊台橋コースなど石橋の名前が付けられているものも複数ある。石橋はランドマーク的な要素も強いので、フットパスコースに含まれやすい地域資源であると考えられるが、そのほか、どのような地域資源がフットパスづくりによって認識され、特に地域に内在する土木遺産がどの程度認

表-1 フットパスコースに記載されている地域資源①

[illegible]

表-2 フットパスコースに記載されている地域資源②

[illegible]

識されているのかを各地のフットパスマップにどのような地域資源が描かれているかを抽出することで比較した(表-1、表-2)。

フットパスマップは、各地の団体が発行しているオリジナルのコースマップ、冊子、書籍に記載されているものを対象とした⁷⁾。ただし、全国の全てのコースを対象とすることは、現在全国でフットパスコースづくりの取組が行われており、開設、試作等コースの位置づけもあいまいな部分もあり、すべてを網羅できているわけではない。

マップに記載されている地域資源は、イラスト、写真、文章で書かれているものすべてを対象とし、トイレ、駐車場、駅、公共施設等は抽出対象としなかった。

エリアは、九州、山梨、東京(千葉含む)、山形、北海道に分類し、地域資源は神社仏閣・文化財等、土木遺産、自然(二次的自然含む)、風景、その他の分野に分類した。石橋、用水路、棚田、ため池などの構造物や造成されたものを広い意味で土木遺産、川、山、海岸などの地形に基づくもの、田畑、茶畑、竹林など農地も広い意味二次的自然として自然に分類した。

これによると、対象とした88事例のフットパスコースマップにおいて、ほとんど事例で寺社仏閣が記されている。加え、地蔵や庚申塚等も多く記載されており、これらが地域社会に普遍的に存在し、且つ地域コミュニティのランドマークとして位置づけられていることがわかる。同様に河川についても、約半数のマップに記載されており、地図として表す際、地形、場所、方向などを明確にできる指標となっていると考えられる。

この他では、地域によって、記載されている項目の傾向が大きく異なる。

土木遺産の代表的な例である石橋、石垣など石造構造物は九州では非常に多くみられるが、他の地域ではほとんど見られない。棚田も同様に九州のみで記載されていた。

九州は土木遺産の記載が他の地域より多く、種類も多様になっている。農地、植生などの記載も多くみられ多様な地域資源を記載している。山梨も土木遺産が比較的多く記載されている。

一方で山形、北海道では土木遺産の記載が少なく特に北海道では自然に関わる地域資源の記載に内容が偏っている傾向がみられる。

古道・峠・橋など道に関わる土木遺産は東京エリアでは特に多くなっている。ただし、橋は通常の道路としての指標か、土木遺産的な地域資源としての位置づけとして表記されているかは判断できなかった。

東京エリアでは田畑や森林、植生などの記載も多く、緑と歴史的な地域資源が好まれていることがわかる。

4. フットパスによる身近な土木遺産の発見とシビックプライド

全国のフットパスマップにおいて、様々な土木遺産が地域資源と認識されていることがわかったが、特に九州や山梨では土木遺産が地域の資源として位置づけられていることは、コース名に土木遺産にゆかりのある内容が含まれているものが多くみられることから判断できる。

例えば、九州では石橋、井手、ため池、三角西港、白銀坂、山梨では信玄の里等の要素がみられる。霊台橋や三角西港など有名で重要な土木遺産も見られるが、用水路やため池は、古いものであっても希少性や文化財的な価値は低いものがほとんどである。しかしながらこれらの土木構造物は古くから地域のインフラとして利用され、地域で管理されつつ現役で機能しているものも多い。また、里道や畦道などの小径は昔から地域の基盤となってきたインフラである。

水路やため池には管理用の道路があることが多く、人との関わりの強い水辺空間は歩く環境が整っているともいえる。

旧道や切り通し、線路跡などは普段認識されていなくても地域の中に埋没していることも多い。

これらの様に、日常生活の中ではごく当たり前になっている身近なインフラは、フットパスコースづくりの過程で美しい道、魅力的な景観として再発見される。コースになったから、コースになるならという理由で、地域によるこれらのインフラの管理頻度が増えた例をフットパス実施者から聞き取った。

また、フットパスコースになったことで地域のインフラについて、地域住民がその価値を発見し、認識が変わった例もある。

美里フットパス小崎棚田コースのある、熊本県下益城郡美里町小崎地区には、等高線を描くような曲線の美しい棚田が広がっている。この棚田は、第11回くまもと景観賞を受賞して以来、視点場となる高台に多くの来訪者が来るようになったが、来往者の多くは視点場近くまで車で乗り付け、写真を撮影後すぐその場を離れるため、路上駐車などに地域の不満が溜まっていた。フットパスコースがつくられ、棚田の中を歩く来訪者が増えた結果、来訪者から棚田の曲線の美しさ、石垣のすばらしさなどを伝えられ、地域住民の棚田や石垣への価値観が大きく変わったことは、コース上の複数の農作者の発言であった。

また、美里フットパス協会に対する聞き取りでは、他地域のフットパスの取組がコース住民によって評価されるさまを見て、自らの地域にこのような水路や道があるのでコースをつくってほしいという要望があったエピソード



図-1 小崎地区の棚田

ドが語られた。

これらの様に、フットパスのコースづくりや地域との関わりの過程で、それまで生活の中で当たり前であった身近な土木遺産が発見され、それがフットパスコースを彩る地域資源として評価、認識されることで、地域住民がその地域の価値を見出していることは、シビックプライドの醸成に繋がっていると言える⁹⁾。

また、普遍的な土木遺産であっても、地域に根差すインフラであり、その存在が認識されることで、地域の価値を高める存在になりえることが示唆された。

5. まとめ

本研究では、フットパスと身近な土木遺産について下記のような事が判明した。

- ①フットパスのコースづくりの過程で地域を歩き地域資源を発見する中で、生活の中に埋没した身近な土木遺産が発見される。
- ②全国のフットパスマップにおいて、特に九州・山梨のコースで土木遺産が多数掲載されていた。これは、コースづくりで地域資源として土木遺産が多く認識されていたことを示す。
- ③北海道ではマップにおける土木遺産の掲載が少なく自然に関する内容が多い傾向にあった。これは、北海道では身近な土木遺産より自然が地域資源として高く価値づけされていることを示す。
- ④東京エリアでは、土木遺産においては古道や切り通しなど歴史的な背景を持つ表記が多く、緑や里山の表記が多いことと共に都市部郊外に対するニーズを如実に表している。
- ⑤フットパスコースが開設され、来訪者と地域住民が関わりを持つことで、交流が発生するだけでなく、地域住

民が石垣や棚田など地域を構成する風景や土木遺産の価値を理解する。

- ⑥フットパスによる身近な土木遺産の発見は、地域の価値を向上させシビックプライドの醸成につながる可能性がある。

つまり、これらのことから、フットパスによる地域づくりは、身近にありふれた土木遺産の発見と価値づけに繋がり、その存在が地域住民のシビックプライドの醸成につながることを示唆されたと言える。

謝辞：本研究の資料収集の大半は、フットパスイベントなどで全国各地のフットパスに取り組む団体から提供いただいたものである。日頃の地域での活動と提供いただいた資料に敬意と感謝の意を表する。

参考文献

- 1) 寺村淳：地域づくりにおけるフットパスの有効性とコーディネート者の役割に関する研究，農村計画学会誌，34. Special_Issue, pp. 219-224. 2015.
- 2) Ramblers HP: <https://www.ramblers.org.uk/>
- 3) WaW HP: <https://thepathornones.co.uk/>
- 4) 神谷由紀子：フットパスによるまちづくり 地域の小径を楽しみながら歩く，水曜社，2014.
- 5) 前掲4).
- 6) 前掲1).
- 7) 「地球の歩き方」編集室：地球の歩き方BOOKS フットパス・ベストコース 首都圏 I，ダイヤモンド・ビッグ社，2010.
- 8) 伊藤香織，紫牟田伸子：シビックプライド—都市のコミュニケーションをデザインする，pp. 206-215, 2013.